違うところから出発するから連携できる

最後に日本学術会議会長で京都大学総長の山極さんが登壇し、それぞれの経験や知見に基づいた登壇者の印象的なコメントを引用しながら、この日の学術フォーラムを総括した。

「今日は（産学の連携のあり方について）本質的な議論ができたと思う。カセムさんは大学の“でたらめさ”を企業と連携すると面白い。それを中立的なプラットフォームに乗せて創造性豊かな旅を一緒にしよう、と呼びかけた。大学が持っている（いい）ものをいかに産業界と生かせるか。そういうものだと私も思った。平田さんは、世界の人を迎え入れる国際化に傾注した方がいいと言った。産業界は世界に出て行き、世界で勝つことを強調するが、それだけが国際化ではない。日本を国際化の舞台にしようとする提言だった。日本を舞台にして世界の人を呼び込んで、さまざまな世界の課題を解決する。この発想はすごい。日本がこれから直面する地域創成に生かせる」

「文化は細切れであってはいけない。いろいろなところに生かせる総合的な視野を持つこと（が重要）だ」「大学は多様性というか、面白いことが出てくる場所でなくてはならない」

「産業界も大学もそれぞれ違うことをやっている。そこから出発した方がいい。だからこそ連携もできるし、違うものを持ち寄って新しいことを創造できる。同じことをやっていたら幅がどんどん狭くなっていく。我々は今そういうことを真剣に考えるべきだと（今日の議論を聴いて）思った」

「日本の大学の研究力と日本の産業の低迷を叫ぶだけだったら日本の文化も政治も世界に遅れているという印象しか与えない。もっと自信をもっていろんな強みを結集して、世界を意識して歩むという意識、世界の先頭に立つ意識を持つべきではないか」

「若者の人生観は大きく変わってきている。これからの若者は複線型の人生を目指していくだろう。ひとつの職業で単線的な人生を歩むのではなく、複数の仕事をしながら、日本と世界を股にかけながらいろんなところで自分の能力を出していく。プラットフォームをいくつかつくって若者達が複数活躍できる場を提供することが産業界と学術界が協力してできることではないだろうか」

山極壽一さん

山極さんは産学連携に関連づけながらSDGsの意義についても語っている。

「研究はSDGsと常に共にあるものではない。研究は面白いことを見つけるためにあっていい。だが、政治を司る行政マンや、産業を司るビジネスマンの人たちと、大学という利益をあまり考えないアカデミックな世界とがプラットフォームでつながるときにSDGsはいい目標になる。そこで新たな知を呼び起こして（社会）実装して、それが世界の課題を解決することにつながれば研究者の本望を遂げることにもなる。頭の片隅にSDGsを置くことでいろんな人とつながれる。つながることで新たな社会、新たな世界が浮かび上がってくる。それが大学にできる一番の貢献ではないか」

（サイエンスポータル編集長 内城喜貴）

関連リンク

- 日本学術会議・日本経済団体連合会主催・学術フォーラム「産学共創の視点から考える人材育成」
- 日本学術会議2018年11月28日提言「産学共創の視点から見た大学のあり方」」